

『中央区から消えたモノ』(2)

明治時代初期、隅田川に架かっていた橋のうち、中央区(旧日本橋区・旧京橋区)には両国橋、新大橋、永代橋の3橋しかありませんでした。川幅が広く、架橋工事や維持が容易でなかったためですが、それを補うように橋と橋の間にはいくつもの渡船場がありました。

明治25(1892)年以降、新佃島(現・佃二〜三丁目)や月島一号地(現・月島)・二号地(現・勝どき一〜四丁目)が造成され、工場や住宅の建設が進みました。陸上交通が発展している現在からは想像できませんが、渡し船は運輸としての役割のほか、人々の生活には不可欠な交通手段でした。明治末頃においても、月島、佃、勝どき、石川島、千歳、安宅、中洲、清住、佐賀町、大川口の各所に区内発着の渡しがありました(『中央区史 下巻』)。今はその役割を終え、いくつかの碑が残るのみです。

また、渡し船の他になくなってしまったものとして水上学校があります。月島にあったことをご存じでし

ようか。今回は月島地域から消えた渡し船と水上学校についてご紹介します。

◇3つの渡し船

月島の渡しは、明治25(1892)年11月に土木請負業の鈴木由三郎が南飯田町(現・湊)〜月島西河岸通(現・月島三丁目)間で有料の手漕ぎ船による渡船を開始しました。その後、明治34(1901)年に東京市へと移管されて、蒸気船による無料の曳船渡船に変わりました。

月島西河岸通(現・勝どき一〜三丁目)〜南小田原町(現・築地)をつないだ勝どきの渡しは、明治38(1906)年に日露戦争の戦勝を記念して京橋区民が渡船場を設置し、東京市に寄付したことに始まります。そして、大正3(1914)年から蒸気船で運航されるようになります。

交通量の増加に伴い、勝鬨橋かちどきの建設が計画されます。明治期から架橋計画があったもののなかなか進みませんでした。昭和8(1933)年に勝鬨橋の建設が着工されました。なお、この橋は昭和15年の皇紀

二千六百年に合わせて晴海地区で開催予定だった、日本万国博覧会の会場の正門延長上にあつたため、結果的にメインゲートとして位置づけられました。万博は日中戦争の激化などの理由から中止が決定したものの、橋は計画通り、昭和15年6月14日に完成しました。万博関連の建造物は、のちに陸軍の傷病兵収容所(東京第一陸軍病院月島分院)となる万博事務局棟がありましたが、度重なる戦禍によって焼失してしまつたため、勝鬨橋が現存する唯一の建造物です。この勝鬨橋の開通によって、月島と勝どきの渡しはその役目を終えました。

佃の渡しは、船松町(現・湊三丁目)〜佃島(現・佃一丁目)間で、築島間もない正保2(1645)年頃に始まっています。明和3(1769)年3月には渡し船が転覆し、船頭や名主が罰せられたとの記事が『佃島年表』に出ています。明治時代には渡し賃が1人五厘であつたので、「五厘の渡し」とも呼ばれていました。大正15(1926)年に渡船の運営が東京市に移管され、無料になりました。そして、昭和2(1927)年3月、それまで手漕ぎだつ

た渡船が、蒸気船による曳船渡船となりました。

そして、昭和39（1964）年には佃大橋が完成し、最後まで運航していた佃の渡しを終了することになり、中央区内にあった渡し船はすべて姿を消しました。

◇水上利用業者とその子どもたち

大正12（1923）年9月1日の関東大震災で陸運は壊滅状態になりました。その代わりに物資を

運ぶ主力として水運が活発に動き出し、全国各地からの救済物資も



水上生活者昭和32年ごろ（米倉陽吉／撮影）
京橋図書館所蔵

運ばれてきました。本船と陸との間の貨物輸送に使用される小さな船を舟船といいますが、運搬量が増えるにつれ舟船も大型化してきました。また、荷役時間の延長、積み荷の監視、陸上との二重生活の回避などの理由から、通いの船頭の中には船で生活する人々がでてきました。そのように船で生活している人々を水上生活者といいます。昭和6（1931）年当時の水上署の調べによると、水上生活世帯は約2500にも上りました。

水上生活者が暮らしていた船は、やじふね炊事船とがありました。宿船は廃船を修理し生活の本拠としたもので、一カ所に停留していました。そのため船数が増えるとう上通行の妨げになり、度々取り調べが行われました。

一方、炊事船の多くは問屋や回漕会社のある河岸などに係留し、必要に応じて移動して積載や運搬業務につきました。多くは船尾にある2〜3畳の空間が家族全員の生活の場でした。積載の仕事が入ると目的の船や倉庫、工場に移動して荷を運搬しました。荷揚げ先

の倉庫に空きがない時は、荷を積んだまま目的地で数日間滞留することも度々でした。移動が多いため子どもたちは学齢期になっても学校に通うことが難しく、常に親と共に行動していました。

船から陸の小学校に通えたとしても、船は朝係留していた場所にも、夕方戻っているとは限りません。下校した子どもたちは親の船の居場所を探しまわり、待ちあぐねて食事もとれず路上で寝て、翌朝空腹のまま登校することも多かったようです。また「中央区史 下巻」

に「船頭の子共に学問はいるもんか」という親の考え方と『なまじ学問などをさせると陸に上りたが』という回漕会社の気持ちも加って」とあり、そうした様々な思いが就学率を低下させていたようです。

◇水上小学校

昭和2（1927）年、水上生活者を取り巻く環境改善、福利増進を目的とした水上協会が設立されました。協会は彼らの子どもたちのために寄宿制の学校設立を世

に訴え、官公署、篤志家ほか有志者に援助を求めました。そして、昭和5（1930）年9月5日、東京水上尋常小学校と寄宿舎が月島西仲通九丁目5番（現・勝どき一丁目11番）に創立しました。

学寮の食費の納付は必要でしたが、授業料は無料でした。初等科1・2年生と高等科の女子の生活時間割は、朝6時に起床、身支度を済ませ、点呼後掃除をしてから朝食、午前中の授業を終えて、12時から昼食でした。

「皇紀2600年記念誌『水上第84号』」で、昭和13年頃の学校の様子を見てみましょう。当時の家庭の食事は、一汁一菜に煮付けや焼き魚が一般的で、寄宿舎での朝食はそれと変わりませんでした。しかし、献立一覧表によると昼食にはコロッケにキャベツ、カレーライス、オムレット、カツレットに野菜サラダ、開化丼（牛丼のようなもの）、魚フライ、みかんや三色パン等、週に3〜4日は現代のメニューと変わらないような献立が並び、栄養にも重点が置かれていたようです。

1週間の時間割を見ると、水上

での環境により眼病や皮膚炎など

ます。

にかかっている児童が多いため、昼休みには肝油服用や必要な児童への治療の時間があります。15時頃授業が終わり清掃を済ませると、おやつの時間でした。夕食は17時からですが、おやつの後夕食までの間に入浴や洗濯、買い物などをを行いました。入浴や洗濯の間は週3回ありました。下級生は20時に消灯となりますが、上級生たちはそれから班長会や週番事務整理などをして就寝しました。土曜日になると帰船する生徒もいました。

月島校舎には初等科1・2年と高等科女子、深川分校には初等科3・6年と高等科男子が配置されました。

86人になりました。しかし、昭和30年代から始まる高度経済成長によって、次第に物流の主流が水運から陸運に代わり、陸上生活に移行する人が増えていきました。

くの不就学児童がいたことから、事態解消のためには一私立の団体では経済的に無理であると水上協会は東京市に陳情を続け、昭和15年3月31日に公立の東京市立水上学校となり、移管と同時に水上協会は解散しました。

しかし分校完成直後、疎開命令が出されたため、初等科3年生以上の希望する児童は茨城県新治郡へ疎開、その後秋田県の田沢湖付近への再疎開が実施されました。戦後は、帰京したもの月島校舎は軍部が使用していたため、すぐには教室での授業を再開できませんでした。そのため、教員が

昭和32(1957)年頃には年間10数人の児童が転校していき、同40年には児童数が45人まで減少したため、東京都は廃校を決定しました。昭和41年3月、創立以来35年で水上学校はその役割を終えました。月島の学寮は中央区水上学寮と改称し中学生を受け入れていましたが、これも入寮者減少のために昭和45(1970)年に廃止となりました。

教員は日常生活についても指導しました。ほとんどの子どもたちは水上で生活をしていたため、石けりなどの陸上での遊びを知りません。教員と一緒に遊びながら、遊び方や数字の書き方などを次第に学ばせる指導方法がとられていました。また、しつけについては、

昭和16年に国民学校令が施行されたことに伴い、水上学校は翌年に「水上国民学校」と改称されました。錬成教育として、24時間海軍の子鈴方式が取り入れられ、伝馬船漕ぎ、手旗信号、モールス信号、水産講習所の海鷹丸船上での

昭和22(1947)年に教育基本法が公布され、義務教育が現在の形になりました。水上国民学校は東京都立水上小学校と改称されました。高等科は中学校に再編成され、生徒たちは区立中学校に通学することになりました。同24年には学校所在地が月島から深川に変更されました。

昭18年には東京都制が施行され東京府と東京市を廃止し、旧府の区域に東京都が設置されました。水上国民学校は、東京市から京橋区へと移管され、さらに深川区浜園町(現・江東区塩浜一丁目3番)には分校も開設されました。

戦後の住宅難から水上生活者が増加し、児童数も昭和27年には1

具体的言葉遣いが示められている

昭和18年には東京都制が施行され東京府と東京市を廃止し、旧府の区域に東京都が設置されました。水上国民学校は、東京市から京橋区へと移管され、さらに深川区浜園町(現・江東区塩浜一丁目3番)には分校も開設されました。

戦後の住宅難から水上生活者が増加し、児童数も昭和27年には1

具体的言葉遣いが示められている

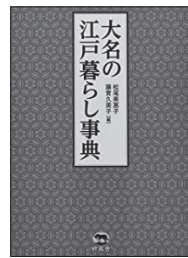
参考文献

書名	著者	出版者	出版年
中央区沿革図集 京橋・日本橋・月島各篇	中央区立京橋図書館／編	中央区立京橋図書館	1994～1996
中央区史 上巻・下巻	東京都中央区役所／編	東京都中央区役所	1958
佃島年表	中央区立京橋図書館／編	中央区立京橋図書館	1966
月島発展史	京橋月島新聞社／編	京橋月島新聞社	1940
幻の東京五輪・万博1940	夫馬信一／著	原書房	2016
幻の万国博覧会 月島四号地(晴海)の万博計画とその背景	増山一成／著	中央区立郷土天文館(タイムドーム明石)	2007
水上 皇紀二千六百年記念 第84号	東京市水上小学校／編	東京市水上小学校	1940
東京都水上国民学校要覧	東京都水上国民学校／編	東京都水上国民学校	1943
水上学校の昭和史一船で暮らす子どもたち一	石井昭示／著	隅田川文庫	2004
図説江戸・東京の川と水辺の事典	鈴木理生／編著	柏書房	2003
昔の子どものくらし事典	本間昇／慣習	岩崎書店	2006
給食の歴史	藤原辰史／著	岩波書店	2018



江戸の大名をめぐる制度、日々の暮らしの様々な場面を、記録史料に基づいて総合的にまとめた大名の心得ともいえる資料。幕府との関係、江戸屋敷の機能や交際、人生儀礼、年中行事等に至るまで、守るべき行動規範が記されている。一見、華やかに見える江戸大名の生活は、武家諸法度を始めとする厳しい決まりに縛られていた。だからこそ、長きに渡り続いた、徳川幕府の武家社会が、本書を通して見えてくる。

大名の江戸暮らし事典(禁帯出)
松尾美恵子 藤實久美子／編 柗風舎



新立案内



東海道五拾三次 描かれた人々の「声」を聴く
藤澤紫、他／編著 NHK出版

歌川広重の浮世絵に描かれた、江戸時代の多種多様な人々の姿を、細かく解説。併せて、絵をもとに生まれた、十三話の人情味溢れる物語が展開される。「日本橋 朝之景」から「京師(京都) 三条大橋」まで、舞台地をめぐるコラムも所載。江戸時代の人々と共に旅を楽しめる。巻末に「東海道五拾三次」の現在を紹介。



市場 北川ナヲ／著 文芸社

江戸時代、三百年以上続いた日本橋魚河岸。それを、築地に引つ張ってきた実在の人物をモデルに、書かれた物語。その熱意と知恵で、困難を乗り越えてきた男の生き様は、現代の私たちにも刺激を与えてくれる。当館では、このモデルとなった人物、田口達三氏が1962年に記した「魚河岸盛衰記」(禁帯出)も所載。